平成30年11月10日
第166号

NJ素流協News

平成30年11月10日発行・発行所　ノースジャパン素材流通協同組合　〒020-0024 盛岡市菜園１丁目3-6（農林会館５階）
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / http://www.soryukyo.or.jp/index.html

「第55回全国林材業労働災害防止大会」に参加

10月24日、福島県郡山市「けんしん郡山文化センター」において、林業・木材製造業労働災害防止協会（以下、林災防）および同福島県支部主催の全国林材業労働災害防止大会が開催された。林災防岩手県支部からは、支部長と被表彰者ら23名が出席し、そのうち当組合事務局からは髙橋常務理事と吉田経営企画課長が参加した。また同青森県支部からは、当組合員の青森県森林整備事業協同組合のほか、素材生産事業体や森林組合の役職員が参加した。

1．第55回大会式典

本大会は、毎年林材業関係者が一堂に会し、労働安全衛生に対する意識の高揚を図り、全国の林材業関係者に労働災害の撲滅への決意を発信することを目的として開催されるもので、昭和39年の林災防創立以来、中断することなく継続されてきた。

開会にあたり、林災防福島県支部・平子作麿支部長（有）平子商店代表取締役）が、「福島県において本大会を開催できることを深く感謝し、お集まりの皆様を心より歓迎する。本年は国の『第13次労働災害防止計画』の初年度にあたり、全国の林業・木材製造業関係者が一堂に会し、本大会が開催されることは、災害撲滅に大変有意義なことと考える」と開会のことばを述べた。

続いて林災防・村松二郎会長が、大会式辞として次のように挨拶した。

林災防・村松二郎会長式辞

「林災防創立以来、関係各位の50有余年の努力があり、平成29年度の４日以上休業の労働災害被災者数は、林業・木材製造業合わせて約２５００人と、過去最低となった。しかし同年度の死亡者数は、林業で40人、木材製造業では６人、さらに30年度９月までの速報値では林業24人、木材製造業６人と、未だ悲惨な死亡災害を根絶するに至っていない。災害発生件数は前年同期より増加しており、依然予断を許さない状況が続いている。

伐木等の林業作業における死亡災害が多発したことから、国の『第13次労働災害防止計画』において、林業が改めて重点取組業種として指定される事態となった。この状況を重く受け止め、林災防は『林材業労働災害防止５カ年計画』を策定し、実践的リスクアセスメント導入促進や、『林業・木材製造業労働災害防止規程』の遵守徹底等の対策に取り組んでいる。現在厚生労働省では、特にチェーンソーによる伐木等作業における安全対策として、労働安全衛生規則等の改正

に向けた作業が進められている。

豊かな森林資源の有効な循環のためには、全ての林材業従事者の安全を守り、魅力的な労働環境をつくることが欠かせない。各事業場におかれても、経営トップが率先して安全衛生活動に取り組み、事業主と労働者が一丸となって労働災害防止活動を推進していただきたい」。

2．表彰行事

厚生労働大臣、林野庁長官、福島県知事、郡山市長ら来賓の祝辞に続いて、表彰行事が行われた。労働災害の防止に顕著な功績のあった団体、事業場、個人に対して表彰状が贈られるもので、事業場賞優良賞等5つの部門で、合わせて6つの事業場と23名の個人が表彰された。そのうち個人賞功労賞では、林災防岩手県支部安全衛生指導員の中居克広氏(宮古地方森林組合参事)が、長年労働災害防止活動に積極的に尽力し、業界の安全衛生水準の発展向上に顕著な功労があったとして表彰された。また4つの県支部の前支部長に対して、長年の貢献を称えて感謝状が贈られた。

3．大会宣言

地元福島県の林業事業体㈲ウッド福生の菊池優子氏が、次の3つの安全行動を掲げた大会宣言案を読み上げた。

(1)「林業・木材製造業労働災害防止規程」に定められた安全衛生教育の実施並びに安全な作業手順と、正しい作業方法を守る

(2)林材業リスクアセスメントの普及・定着にすべての事業場で取組む

(3)林材業労働災害防止計画の目標である労働災害ゼロを、すべての事業場で目指す

4．活動等紹介

厚生労働省福島労働局・川又修司労働基準部長の講演「最近の労働安全衛生の動向について」に続き、協和木材㈱(本社東京都、佐川広興代表取締役)安全衛生担当・乾燥施設課長の金澤忠氏が、「我が社の安全衛生」と題して、同社の労働災害防止活動について発表を行った。発表の要旨は次のとおり。

・協和木材株式会社　会社概要

昭和28年に福島県塙町で創業。昭和38年に建設した第一工場ではスギ、マツ、ヒノキ材を中心に多種少量生産方式にて製材を行う。昭和48年株式会社を設立。平成元年塙林間工業団地に第二工場を建設し、大量生産方式へ移行。平成24年、同29年に集成材工場を増設・新設する。公有林や素材生産者から素材を購入する一方、立木購入による素材生産と間伐による森林育成も行い、循環型社会の形成を図っている。

・安全衛生の組織と活動

安全衛生活動の推進を事業活動の最優先事項と位置付け、社長による安全衛生巡回や、職制を問わず参加する定期巡回等、経営トップと従業員の意識共有により、快適で安全な職場環境の構築に努めている。

社内に「中央」と「課別」の安全衛生委員会を置き、各所属現場の安全性向上について協議する場としている。

リスクアセスメント講習会、ヒヤリハット講習会等各種社内講習会や、生産革新プロジェクト、改善提案制度など、自主・自発型の人財育成を通じて、安全風土の構築を目指している。

協和木材㈱・金澤　忠氏の発表

「手を抜くな　作業手順と　基本動作」
「林業死亡労働災害多発警報」発令中！

林災防は一定期間に死亡災害が連続的に発生したとして、福井県、岩手県、北海道に林業死亡労働災害多発警報を発令しています。事業主と従業員が一丸となり、安全作業の徹底と労働災害の根絶に努めましょう！

トピックス

横澤孝一副理事長（横澤林業㈱代表取締役）に緑化功労賞

10月4日、福島県福島市内のホテルにおいて、平成30年度東北・北海道地区緑化推進協議会・緑化功労賞表彰が行われ、当組合副理事長の横澤林業㈱横澤孝一代表取締役が齋藤卓夫会長より同協議会表彰状と、あわせて国土緑化推進機構・佐々木毅理事長名の感謝状を授与されました。

功績の概要として、①地元岩手県岩手町の森林を中心に素材生産と森林整備を行い、地域林業振興に貢献したこと、②伐採跡地をそのまま森林所有者へ返すのではなく、造林・保育を行い林業経営が継続できる状態で返す「伐ったら植える」持続的林業を行ってきたこと、③ノースジャパン素材流通協同組合の前身である岩手県素材流通協同組合の設立当初から参画して組合運営の中核を担い、また地元労働者の雇用はもとよりいわて林業アカデミー卒業生を社員として迎えるなど、地域経済に大きく貢献してきたことなどが高く評価されました。

緑化功労賞表彰を受ける横澤副理事長

盛岡において牧元林野庁長官講演会の開催

岩手県と富士大学（岩手県花巻市、岡田秀二学長）は10月5日、盛岡市内のホテルにおいて、今年8月1日就任した林野庁・牧元幸司長官の林業講演会を開催した。県内の森林管理署幹部や県・市町村林務担当職員、林業団体関係者等110人余が参集し、牧元長官の講演「林業・木材産業の成長産業化に向けて」を聴講した。牧元長官は講演の中で、現在の森林資源の状況と林業が抱える構造的問題に触れ、その対策として創設される森林環境税（仮称）等の仕組みや、林業成長産業化に向けた各分野の取組について解説した。

平成30年度林野庁木材安定供給（生産・販売）研修で講義

東京都八王子市の林野庁森林技術総合研修所で全国の森林管理署等の収穫・生産・販売担当職員を対象に実施された「木材安定供給（生産・販売）研修」において、10月24日、当組合鈴木理事長が「採材方法と丸太の流通」と題して講義を行った。

全素協第131回理事会に出席

全国素材生産業協同組合連合会は10月18日、東京都において理事会を開催し、当組合から鈴木理事長、髙橋常務理事が出席した。翌19日には全国国有林造林生産業連絡協議会とともに国会議員会館と林野庁を訪れ、平成31年度森林整備のための予算の確保等についての要望活動を行った。

ＮＪ素流協平成30年度第4回理事会開催

当組合は10月30日盛岡市において、平成30年度第4回理事会を開催した。主な議案として、7月末以降に加入申し込みのあった6名の新規加入組合員の承認が行われた。これにより組合員総数は161名となった。

納入丸太の受入検査を実施

当組合では10月24日、宮城県石巻市の西北プライウッド㈱土場において、納入丸太の受入検査を実施した。この検査は、組合員が納入する丸太の品質向上を目的として、随時抜き打ちで

納入丸太の受入検査の様子

実施しているもので、今回は組合員2名が出荷したトラック2台分の丸太について、工場の原木受入担当者の立会いのもと、ＮＪ素流協職員4名が検査を行った。結果の概要は次のとおり。

〈径級〉 木口に表示された径級が実際の径級と異なる（過大、過小）ものがあった。

〈本数〉 1業者について、実際に納入された本数が納品書よりも不足していた。

〈材積〉 同者について、径級が過大に記載されたことと本数の不足により、実際の材積が納品書記載の材積より少なかった。

〈長さ〉 伸び寸が納入規格よりやや短い材があった。

〈欠点〉 規格に適合しない曲がり、大節、根張りのあるものがあった。

以上の結果を踏まえ、該当する組合員に対し直接指導を行いました。

当組合では、出材原木の品質向上を図るとともに、納入先工場との信頼関係を維持していくため、今後も定期的に受入検査を行うこととしています。組合員の皆様には、造材の際は十分注意していただくとともに、納品書について正確に記載していただくようお願いいたします。

国有林素材山元委託販売　入札結果

市　日:　平成30年10月29日(月)

市　場:　岩手南部森林管理署　　（参加人数10名）

売払番号	樹種	長級(m)	径級(cm)	等級	本数	材積(㎥)	応札枚数	土場
603-1	スギ	3.00	18-32	一般材	214	35.472	5	中ノ林
603-2	スギ	3.00	18-34	一般材	311	52.646	5	中ノ林
603-3	スギNA	2.00		低質材	層積	14.780	3	中ノ林
603-4	スギ	4.00	11-13	一般材	348	20.814	2	台川
603-5	スギ	4.00	14-16	一般材	264	23.328	4	台川
603-6	スギ	4.00	14-16	一般材	281	24.342	4	台川
603-7	スギNA	2.00		低質材	層積	19.958	3	台川
603-8	スギNA	2.00		低質材	層積	19.051	3	台川
603-9	スギNA	2.00		低質材	層積	22.025	3	台川
603-10	スギNA	2.00		低質材	層積	17.993	3	台川
603-11	スギNA	2.00		低質材	層積	19.404	3	台川
603-12	スギNA	2.00		低質材	層積	19.051	3	台川
603-13	スギ	4.00	8-13	一般材	349	19.808	5	志賀来
603-14	スギ	4.00	8-13	一般材	313	18.268	5	志賀来
603-15	スギ	4.00	14-16	一般材	297	27.654	6	志賀来
603-16	スギ	4.00	14-16	一般材	641	57.414	5	志賀来
603-17	スギ	4.00	8-13	一般材	191	10.246	3	本内川
603-18	スギ	4.00	14-16	一般材	151	13.410	4	本内川
603-19	スギ	3.00	18-28	一般材	124	17.436	3	本内川
603-20	カラマツ	4.00	8-13	一般材	50	2.402	2	長橋
603-21	カラマツ	4.00	14-16	一般材	46	4.332	2	長橋
603-22	カラマツ	2.00	18-28	一般材	56	5.007	1	長橋
603-23	カラマツ	4.00	18-28	一般材	62	10.566	1	長橋
603-24	アカマツNA	2.00		低質材	層積	19.215	3	長橋
603-25	アカマツNA	2.00		低質材	層積	9.337	3	長橋
合計					503.959			

映画のおすすめ

『日日是好日』（にちにちこれこうじつ）

映画のセットに組合員の製品が使われています

10月13日全国公開となった、女優・樹木希林さんの遺作でもある映画「日日是好日」に登場する茶道教室のセットの屋根材として、当組合員大上木材工業㈱（青森県八戸市）の製品である屋根下葺材「コロシート®」が採用されました。特別な施工で古民家の風合いを出しているとか。エンドロールには美術協力として社名も登場するそうです。是非ご覧ください！

監督・脚本：大森立嗣　　原作：森下典子
出演：黒木華、樹木希林、多部未華子、鶴見辰吾ほか

＊管内需要先情報＊

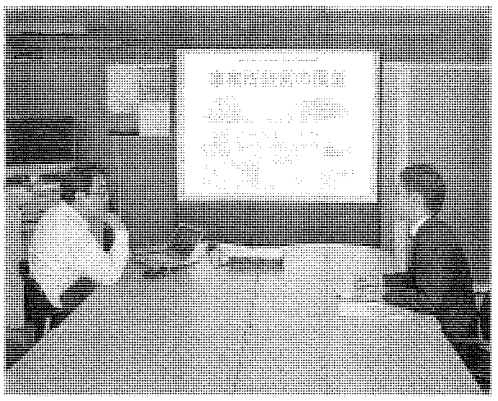
1．11月29日(木)、国道340号「立丸峠」区間が全線開通します！遠野～旧川井村、㈲川井林業、㈱ウッティかわいのアクセスに非常に便利です。是非ご活用ください。

2．セイホク㈱第一工場納入について、10月より、石巻港湾立入規制のため、工場ゲート通過時に「制限区域立入許可証」の提示が必要になります。申請手続がまだの方は、至急、素流協までご連絡ください。

林野庁若手職員の実務研修を受け入れました

当組合は、林野庁の本庁若手職員を対象とした「林業等実務研修」の研修先に選ばれ、10月15日～19日に研修生一人をお迎えしました。

研修に来られたのは、盛岡は初めてという森林利用課庶務係長の松本圭介氏で、ＮＪ素流協の様々な業務を五日間にわたって経験いただきました。最終日には研修の一環として、素流協ニュースの記事を書いていただきましたので、ご紹介いたします。



鈴木理事長の講話で研修がスタート

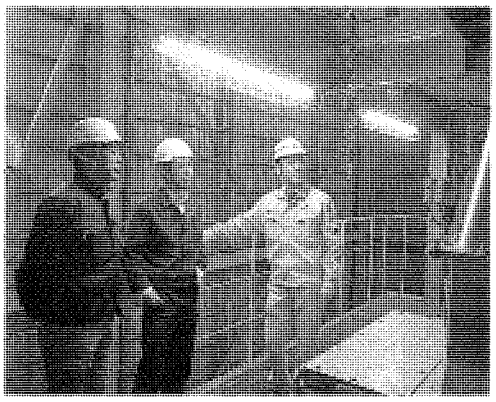
寄稿　ＮＪ素流協実務を経験して

林野庁　森林利用課　松本　圭介

一日目は鈴木理事長、髙橋常務、竹田参与、小野寺部長から組合の概要説明を受けた。ＮＪ素流協は組合員の素材を共同販売する組織である。また各種研修会や後継者育成事業も行っており、組合員のための組織であると強く感じた。さらに、短コロ活用や原木トラック業界への支援などの新たな取り組みは大変興味深かった。

二日目、三日目は営業企画部の方々に共同販売や薪販売についてご説明いただき、伐採現場や国有林素材山元委託販売の山元土場等での外業も経験させていただいた。また、㈲川井林業では11月に行うカラマツの集成材用ラミナの強度試験に関する打ち合わせを行った。どのような丸太からどのようなラミナが製造できるのか明らかにすることが目的で、径に着目して試験を行うとのことであった。共に行動していて驚いたことが、かかってくる電話の多さである。材の規格に関する問い合わせ、必要な材の相談、森林管理署との委託販売に関する打ち合わせなど、移動中も休む間がなかった。このような細やかなやり取りが組合員や工場との信頼関係を築き、出荷・納入調整を円滑にしているのではないかと感じた。

四日目、五日目は経営企画管理部の方々の業務を経験させていただいた。その中でも後継者育成事業として婚活パーティーを行ったというお話は今まで聞いたことがなく、ユニークな取り組みであると感じた。ある組合員の方からご子息の結婚相手について相談を受けたことがきっかけで実現したとのことで、日頃から困りごとをお聞きして真剣に対策を考えているからこそできることであると思った。また、ＮＪ素流協では納入する材の証明を重要視しており、「原木納入開始届」の提出を義務付け、独自のシステムで工場への納入と伐採現場の情報を管理している。そして、バイオマス材が出荷されるすべての現地確認を行っており、私も同行させていただいた。さらに、㈱花巻バイオマスエナジーで発電所の視察をさせていただき、今後の展望等についてお伺いできた。



金井取締役から発電所施設の説明を受ける

今回の研修では流通事業者の立場で素材生産業者の方や工場の方と接することができた。また国有林の関わる業務も多くあったが、いつもとは逆の視点で事業を見ることができた。今後はこの貴重な経験を業務改善に活かしていきたい。最後に、ＮＪ素流協の皆様には業務で多忙の中、研修を受け入れていただき感謝申し上げます。

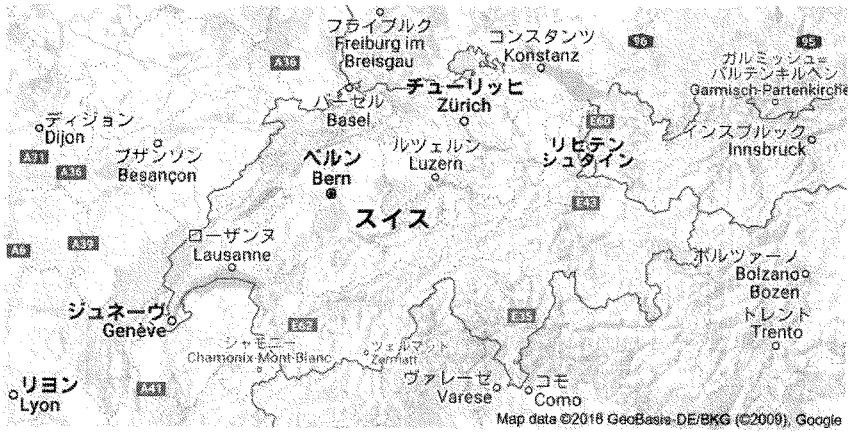
視察報告

スイスの林業生産現場と林業機械会社視察（その1）

ノースジャパン素材流通協同組合 営業企画部主任　佐々木　絵　理

この度、9月15日～21日の7日間、スイスにおける林業生産現場と林業機械会社の視察研修に参加させていただきました。その視察内容を報告致します。

＊　＊　＊



本研修は、鹿児島県素材生産業協同組合連合会の主催によるもので、東京大学名誉教授の酒井秀夫先生を視察団長として25名が参加。当組合関係者では、㈲中村造林（秋田県小坂町）の中村豊会長夫妻が参加されました。

◆移動

羽田空港から約12時間のフライトでドイツ・フランクフルトへ。そこで乗り継ぎ、約1時間でスイス最大の都市チューリッヒへ到着。

◎スイス

正式国名はスイス連邦。国土面積は、ほぼ九州に等しい41290㎢。人口約840万人。通貨はスイスフラン。公用語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4種。酪農と畜産が盛んで農業収入の70％を占めています。林業関連就業人口は約8万人で、約1500の林業主があります。

◆スイスの森林

森林面積は127万haで、110万haが生産森林。30％が私有林、70％が公有林です。

森林の年間成長量は1000万㎥。700万㎥伐採し、森林蓄積量は360㎥／ha。木材消費量は輸入材を含め1050万㎥。平均樹齢は百年。トウヒ、モミ、ブナの3種で森林の77％を占めています。また、森林を見ると幹が真直ぐで択伐が主となっているのが判ります。一般的な回帰年は30年で、択伐の基本は成長最大での伐採ですが、スイスではとくに天然更新を促進するために林床に光が入るように行っています。皆伐はあまり行われず、皆伐する場合は小面積で、皆伐跡地を牧草地にすることもあります。

◆ウィッセン・ケーブルシステムズ社工場視察

社長のヤコブ・マーティン・ウィッセン氏に会社概要等の説明をいただきました。

ウィッセン社は、1926年創業の架線集材システムの生産販売を行う会社です。従業員は、41名。原木用だけでなく、建設現場で使用する架線システムも製造しています。

原木の集材システムは、中間支柱を搬器が乗り越え、ケーブルが主索とメインラインの2本で済むとてもシンプルで安全なシステムとなっています。架線は、最長で3kmまで（両サイドは50mずつ）、重さは4tまで可能です。平行または、扇状に張ることができ、支柱は人工支柱で1本52kg、ねじ止めで18mまで継ぎ足し可能です。

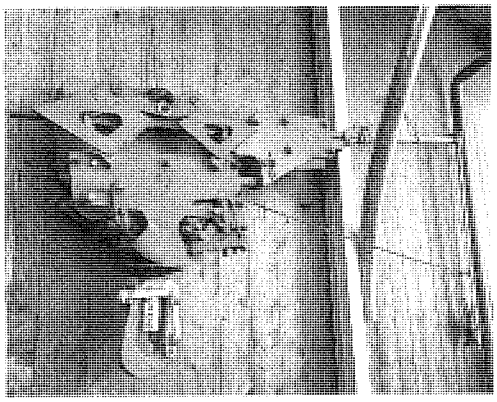
これらの製品は、95％がスイスの自社工場で生産されています。架線関連製品の70％は60か国以上に輸出しており、主な市場はスイス、オーストリア、イタリア、ルーマニア、南米、アジアです。日本へは、1951年に長野県野尻営林署に集材機を輸出したのを最後に、日本と

の繋がりが途切れていましたが、２０１６年から日本市場に再進出、島根県浜田市の㈱ライトが代理店となっています。

長野県野尻営林署で使用された集材機は、現在、群馬県の沼田林業機械化センターに展示されているそうです。

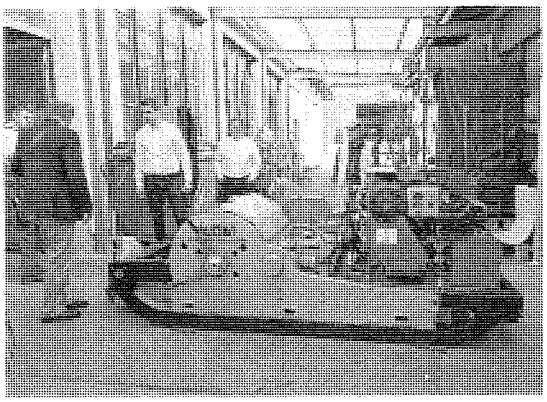
説明を受けた後、デザインルームと工場を見学しました。大小様々な大きさの搬器や、滑車等の製品の他、ルーマニアから修理依頼のあった１９６４年製の搬器も置かれていました。古いものでも部品は有り対応可能とのことでした。

また、木製のそりが付いたウィッセン社初のウィンチや、１９３８年に作成し特許を取得した世界初の搬器を見ることができました。


1938年創業者作・特許取得の世界初の搬器

工場を見学した後は、ウィンチＷ30の操作実演を見学しました。

Ｗ30ウィンチは11㎜ケーブル１３４０ｍまで、10㎜ケーブル２５００ｍまで使用可能。１６００kg、１７０ps（Ｗ30は75psから１７５psまで）、最大回転数４２００ＲＰＭ、内リフト力５・４ｔ、外リフト力３・５ｔ、平均４・１ｔで、素材には４ｔあれば十分とのこと。


W30ウィンチの操作実演

〈スイスの観光スポット〉

◆ユングフラウヨッホ

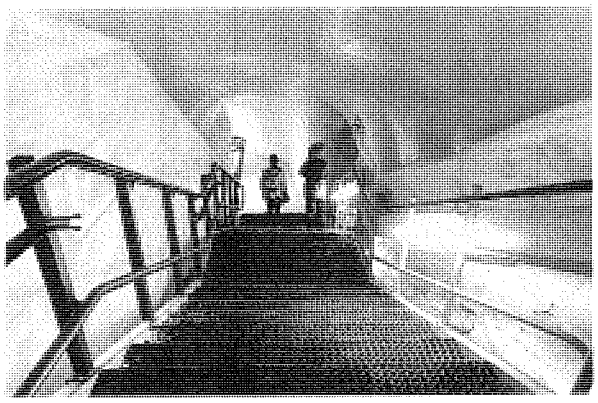
３つの登山列車を乗り継ぎ、ヨーロッパ最高地点の鉄道駅ユングフラウヨッホ駅（３４５４ｍ）を目指します。車窓から見える、スイスを代表する名峰アイガー、メンヒ、ユングフラウが連なる姿はとても雄大で、自然の美しさに感動しました。

アイガーの北壁とメンヒを斜めに貫いたトンネル内部の２つの駅では５分間停車。展望デッキの窓越しから、切り立った崖や海のように広がる氷河を見ることができます。

背景左からアイガー、メンヒ、ユングフラウ

ユングフラウヨッホでは、標高３５７１ｍのスフィンクス展望台へ。アルプス初のユネスコ世界自然遺産に登録された総面積８２４平方㎞、長さ22㎞アレッチ氷河が眼下に広がる予定でしたが、あいにくの天候で外は真っ白。見ることができず残念でしたが、アレッチ氷河の上を少し歩いてきました。また、地下20ｍアレッチ氷河の下に造られた氷の宮殿アイスパレスでは、氷の回廊を回りながら氷の彫刻を見ることができます。

（次号へつづく）


氷の宮殿アイスパレス

ちょっと気になる木の話 28

北海道時代の販売の思い出

以前京都時代の思い出を書いたが、同様に北海道時代の思い出を綴ってみたい。現在でも役に立つことは多いと思う。

1．1玉のミズナラで一山の価値と同じ

立木のまま販売した天然林択伐の山があり、５００万円で契約した。しかし、これはという木にはテープを巻いて、伐採・玉切りといった直接経費だけを別途支払う仕組みがあり、この山ではミズナラ1本だけテープを巻いていた。ある日、買った業者から「伐ったから見に来い」と連絡があり行くと、「こんなボロ丸太が欲しいのか」と。元口、末口両方から腐れが入り、全くの腐朽木であったが、追い上げ切りをしていったら、1玉だけ何とか腐れない丸太が取れた。赤身が紫がかっており、末口70㎝以上、長さは有尺で、2・5㎥程度だった。これを銘木市に出品したところ、なんと㎥単価２００万円、1玉５００万円となり、売った。一山と同じ売り上げとなったのである。後日、買い手業者が訪ねてきて「おみそれしました」と言われたので、ニッコリだった。広葉樹でも針葉樹でも1本だけでも、残し木には注目する必要が本当にある。

2．土場のハンノキだけを売る

当時の択伐は30年サイクルだったので、山元に巻立てる土場は30年前の土場を活用する例もあり、そこにはハンノキがびっしりだった。製材工場に聞いたら、ハンノキだけ巻立ててくれれば高く買うと言う。そこで、土場作設支障木をきれいに伐ってもらい、ハンノキだけ巻立てて、高く販売できた。何に使うのか後日教えてもらったところ、乾燥すると軽いので、桐ダンスの桐と桐の間に挟むと。「ウ～ん」である。その後、シナノキ、サワグルミ等単独樹種椪は価格が出るので樹種量に応じてつくった。また、エンジュだけが生えているところもあり、これは国道脇にわざと積んでおいた。国道を通る複数の木材業者から「いつ売るの」と問われ、販売前に競争原理を効かせることができた。盗まれたらと考えると、今ならちょっと躊躇するかも知れない。

3．ドイツトウヒ、ストローブマツの販売

旧御料林だったせいか、明治期植栽のドイツトウヒがあった。これが、30ha程きれいに成立していたので販売することにした。最初ドイツトウヒは要らないといっていた業者が、大量に購入した後は反応が全くなかった。そこで、製材した後の製品を見に行くと、どこにもドイツトウヒと印字した製品はない。聞くとドイツトウヒでは売れないのでエゾマツでと。ふと気がついた。そうかドイツトウヒもエゾマツもスプルースか！なるほど納得である。こうして、日本のスギ・ヒノキも米スギ・米ヒに代替されていったのか、である。ところが、ストローブマツは、チップ業者も買ってくれないので結局そのまま立派な林分として残ってしまった。チップ業者に聞くと、輪生節のヤニがチップの刃について、すぐ使えなくなるからダメだと言う。しかし最近北海道ではストローブマツは逆に欲しいと言う。何にと聞くと、ラミナにすると。輪生節だから、節と節の間は無節であり、フィンガージョイントにすれば、無節のラミナができるという。納得である。残したストローブの美林は販売されたのだろうか？気になるところである。

4．エゾマツの銘木市出品

今でこそ、エゾマツ天然木の大径材なら銘木市に出品されることもあるが、平成初頭には広葉樹だけであった。しかし、あまりにも良い丸太だったので、出品したいと申し出て了承された。そこで、一般的な3．65m採材では物足りないので3・65＋3・65＝7・30mで出品したら、確か3万円／㎥くらいで売れた。それが後にヒバ等で盛んに行われた「つなぎ検知」につながっていく。切ってしまったらつなげないので、多少欠点の曲がりがあっても切らずに販売したのである。

色々思い出も尽きないが、当時は正に国産広葉樹全盛時代である。諸般の情勢から、再び国産広葉樹に注目が集まる昨今である。

平成30年10月分の販売実績

樹種	合板・ＬＶＬ用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量(㎥)	前月比(%)	前年同月比(%)	当月出荷量(㎥)	前月比(%)	前年同月比(%)	当月出荷量(㎥)	前月比(%)	前年同月比(%)
スギ	11,205	114.0	120.8	12,163	85.0	111.0	23,368	96.8	115.5
カラマツ	4,706	101.6	200.4	209	246.0	27.6	4,914	104.2	158.3
アカマツ	2,613	101.7	88.0	0	*	0.0	2,613	101.7	84.6
その他	0	0.0	*	275	63.4	441.3	275	50.4	441.3
合計	18,523	108.1	126.9	12,647	85.2	106.3	31,171	97.5	117.6

樹種	燃料用		
	当月出荷量(t)	前月比(%)	前年同月比(%)
スギ	9,528	100.0	120.6
カラマツ	1,568	86.9	117.0
アカマツ	1,685	374.3	74.5
その他	0	0.0	0.0
合計	12,781	107.4	107.7

注)＊印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

樹種	今年度累計			
	合板・ＬＶＬ用(㎥)	製材・集成材・その他用(㎥)	計(㎥)	燃料用(t)
スギ	76,626	84,622	161,249	56,056
カラマツ	25,814	1,492	27,306	12,720
アカマツ	19,823	0	19,823	9,611
その他	111	2,045	2,156	117
合計	122,374	88,160	210,534	78,505
目標達成率(%)	58.3	60.8	59.3	62.8
計画量	210,000	145,000	355,000	125,000

【平成30年10月の需給動向】

●製材用・集成材用・合板用全ての原木の引き合いが強く、原木の確保に苦労している。
●原木の引き合いは樹種に関係なく全樹種強く、一部値上げの需要先も出ている。
●燃料用原木は比較的順調に出材。これから伐採が多くなるアカマツに更に期待する。

耳からウロコ

自給率の低い林産物は？
― 純和風な物も多い ―

自給率の低い林産物を考えてみよう。まずは、漆器に使う漆である。英語では、陶器がchinaなのに対して、漆器はjapanである。しかし、漆の自給率は数%であり、ほとんどが中国からの輸入である。文化庁から文化財への国産漆利用の方針が出たため、岩手県浄法寺の漆振興が叫ばれている。漆の採取は夏場のため、稲作とコラボができず、早い段階から輸入漆が使われてきた。漆器加工の職人で構成される漆工協会は、林野庁所管となっている。

二番目は、桐である。これも自給率は一桁程度で、中国から輸入される。一時期意外なことにブラジルからも輸入されていた。ブラジル移民の頃に、女の子が生まれたら桐を植えるという日本の伝統を守るため、桐が持ち込まれたという。日本の桐は高いが、成林が難しいこともあり、国産桐の振興は進んでいない。

三番目は、ラーメン食材のシナチクとキクラゲである。シナチクは漢字では支那竹だが、タケノコから作られる。竹の繁茂拡大が問題となっているが、ほとんどが輸入されている。キクラゲもチャンポン麺に利用されるが、輸入である。やっと、ここにきて菌床物が国内で生産されてきているが、まだ全然足りない。鹿児島時代に天然キクラゲを取ったが、全枝まで一斉に発生するので、その採取労力は集中し、労働力配分は難しいと想像できる。

次は、トラックのボディやウッドデッキ用の南洋材である。腐りにくさ、適度な密度と堅さが求められる。クリーンウッド法施行で最も影響を受ける用途であろう。業界の技術と知恵で国産材利用に進むことが期待される。

最後は、何と言っても梁・桁の横架材である。太く材積が大きいため、住宅の木材利用材積の王様である。しかし現実は、米マツ、レッドウッド集成材中心で、自給率は数%と言っても過言ではない。米マツとスギのハイブリッドもあるが、純粋の国産材梁の開発が必要である。２階床とのからみで梁せいをむやみに大きくできない場合があり、カラマツ等高強度丸太・ラミナの流通を確立させることが一番の方策である。